

浄瑠璃太夫たちの〈ウタイ〉考

——近松作品における謡曲関係文字譜と作者・作曲者の意図をめぐって

田草川 みずき

はじめに

江戸時代前期の仮名草子作家・浅井了意は、浄瑠璃太夫の掾号受領が相次ぐ明暦期の上方浄瑠璃界について、次のように記している。

めんく受領して。がたらつく中に。喜太夫といふもの上総の掾になりて。太平記をかたる。その曲節。平家とも舞とも謡ともしれぬ島者なり（『東海道名所記』万治元（一六五八）年¹）

「平家とも舞とも謡ともしれぬ島者」と評された当時の浄瑠璃は、社会風俗に敏感だった浅井了意に、まだ得体の知れない新興芸能としか捉えられていなかったことが読み取れよう。竹本義太夫が竹本座を創設する、たった三十年前のことである。

それに対し、比較対象として挙げられた平家（平曲）、幸若舞曲、謡曲は、発生から時を経て、この頃には既に古典化の道を歩んでい

た。後発の浄瑠璃は、先行芸能とは異なる新たな音曲を模索しつつも、人々に親しまれたそれらの節を、〈平家〉〈舞〉〈謡〉という節譜名に託して浄瑠璃中に取り込んでゆく。

中でも謡曲は、義太夫節発生期と時を同じくして流行し、市井の人々にまでその享受層を広げており、義太夫節に深い影響を与えた。さらに、最後の古浄瑠璃太夫と称され、竹本義太夫もそのワキ語りを勤めたとされる宇治加賀掾が謡曲を重く用いたことも、その後の義太夫節における謡曲関係節譜の多さに繋がっていると考えられる。加賀掾の芸論『竹子集』²序文中には、浄瑠璃の一部に、他の芸能から撰取した節をあてこむ場合の注意点が示されている。

浄るりの中へ外の音曲入るとも。それへうつる所。又それより浄るりへうつる音。木にたけをつぎたるやうにてはせんなし。とかくうつりをよくく稽古有べし

こういった注意書きが生まれた背景として、謡を好んだ加賀掾の

正本に、謡曲関係節譜が多用されていたことが挙げられる。特に、一曲中の聞かせどころとなるような箇所には謡曲からの節を取り入れることが多かったため、加賀掾にとって「うつり」の良し悪しは、重要な問題だったのである。

加賀掾の謡曲趣味は、前掲の『竹子集』序文の、「浄るりに師匠なし。只謡を親と心得べし」との書き出しでよく知られるところである。当時、独立して竹本座を興し、加賀掾と強いライバル関係にあった義太夫はこれに反発し、「むかしの名人の浄るりを父母として。謡舞等ハやしなひ親と定め侍る。しかし親の心子しらず。」（貞享四年義太夫段物集³）と記した。しかしそうは言いながらも、義太夫は加賀掾に負けず劣らず、謡曲関係の節付を自らの語り物に採用しているのである。

そのことを統計的に示すことができる好資料が、山根爲雄編『近松全集』文字譜索引⁴である。筆者は以前、近松門左衛門と加賀掾それぞれの道成寺物、すなわち、能「道成寺」を題材とした浄瑠璃作品を比較分析し、同じ「道成寺」からでも、加賀掾は上掛り系、近松は下掛り系の謡曲本文を引用していることを指摘している（拙稿「近松と加賀掾の「道成寺」——浄瑠璃作者が引用した謡曲本文の系統をめぐって」⁵）。このように、浄瑠璃に引用された謡曲本文の系統を調査することで、作者問題に何らかの示唆を得ることができるとはならないかと考えたことから、筆者は次に、謡曲本文の引用箇所を知る一方法として、『近松全集』文字譜索引⁴に拠り、『近松全集』中

の謡曲関係文字譜の記譜箇所をピックアップすることを試みた。『謡曲二百五十番集索引』⁶を活用し、謡曲関係文字譜が付された浄瑠璃詞章が、特定の謡曲から引用されたものであるか否かを調査する、というものである。

しかしながら、たとえ近松が謡曲詞章を作品中に多く引用しても、それに謡曲関係の節付をするかどうかは、太夫の考え方や謡曲に関する知識によってかなりの差異があると考えられる。そういった意味で右の方法は、謡曲詞章引用箇所の特定のためには万全なものではなかったが、調査に伴って作成した一覧表は、近松作品を語った太夫たちの、謡曲関係文字譜使用の回数や用い方が明らかに点で非常に興味深いものとなった。

浄瑠璃作者としての近松は、宇治加賀掾、竹本義太夫、そして義太夫没後の新世代の太夫といった、複数の太夫たちに作品を提供している。ただし実際の上演に際して、その作品に節を付ける作曲者は、近松ではなく常にその太夫たちであった。横道萬里雄氏は、原則として作者と作曲者が同一である能について、「作詞の段階で、作者が作曲を頭におきながら書きつづっている」とし、能作者による作曲方法の特色を示されている（能本の概観⁸）が、作者と作曲者が異なる浄瑠璃では、そういった研究手法を取ることは不可能であろう。しかし、浄瑠璃作品の本文と節付の間に横たわる種の溝は、作者問題とはまた異なる、新たな解釈を齎してくれるものだと考えられるのではないだろうか。

本稿では、『近松全集』文字譜索引』を手掛かりに近松作品中の謡曲関係記譜箇所を時代毎に分析することで、浄瑠璃という新しい芸能ジャンルの作者と作曲者が、優れた先行芸能として影響を受けた謡曲を、どのように捉え、活かしていったのかを探りたい。

*

『近松全集』文字譜索引』は、『近松全集』の浄瑠璃編一四巻(第一七巻中の補遺一篇を含む)が収める浄瑠璃作品一一三篇を対象にした、いわゆる文字譜の索引である。先に記した通り、筆者はこの中から、謡曲関係文字譜の記譜箇所を確認してデータを採取し、『近松全集』謡曲関係節付箇所一覧』を作成した。データを採取した謡曲関係文字譜、および項目は以下の通りである。

【謡曲関係文字譜】三十五種

うたひかゝり／うたひきん／ウタイ／ウタイウ／ウタイカ、リ
 ／ウタイサシ／ウタイノット／ウタイハル／ウタイ詞／ウタイ
 中／ウタヒ／ウタヒクセ／ウタヒ地／下歌／次第／序うたひク
 セ／上歌／惣地謡／謡／謡ウ／謡カ、リ／謡キン／謡クセ／謡
 クル／謡サシカ、リ／謡ハル／謡フシ／謡一セイ／謡下／謡詞
 ／謡次第／謡地／謡中／謡中ウ／謡同音

【データ項目】一四種

- | | |
|----------|--|
| ① 番号 | 浄瑠璃作品の通し番号。 |
| ② 浄瑠璃作品名 | |
| ③ 作品名よみ | |
| ④ 座 | 宇治座・竹本座の別。 |
| ⑤ 太夫 | 座を代表する太夫名。 |
| ⑥ 上演年 | |
| ⑦ 西暦 | |
| ⑧ 月 | |
| ⑨ 譜名 | 謡曲関係文字譜名。 |
| ⑩ 譜名よみ | |
| ⑪ 謡曲名 | ⑨が記譜された箇所の詞章から、特定の謡曲の当て込みを推定できる場合の曲名。該当する曲が特定できない場合は、「？」を記入した。 |
| ⑫ 謡曲名よみ | |
| ⑬ 浄瑠璃詞章 | ⑨が記譜された箇所の詞章を一部抜粋。 |
| ⑭ 備考 | |

次節からは、存疑作を含む近松作品一一三篇を、I加賀掾・義太夫競合期、II竹本座独走期、III義太夫没後の新世代期の三期に分けて考察を行う。紙数の関係上、表の全体像を掲出することは不可能

なため、原則として、

A 年代

B 作品数（太夫毎の内訳）

C 謡曲関係文字譜の種類

D 関連謡曲の種類

について各節の冒頭に記し、分析を進めることとする。

I 加賀掾・義太夫競合期

『近松全集』には、近松作である外部徴証が得られないなどの、いわゆる近松存疑作が二三作収められている。⁹⁾この二三作を、存疑作であることに拘らず、一一三作品の中で年代順に並べた場合、一三作中一〇作までが、ここで扱う加賀掾義太夫競合期に含まれることになる。

『近松全集』が、最も古い近松存疑作として取り上げたのは、延宝五年の「天狗の内裏」であった。もちろん、それ以前にも近松の関与が疑われている作品は存在するが、『近松全集』では、より慎重な編集態度を取って存疑作を絞込んでいる。従って、本節で加賀掾・義太夫競合期とするのは、「天狗の内裏」刊行の延宝五（一六七七）年から、近松が竹本座の座付き作者となる直前、大当たりをとった「曾根崎心中」初演の元禄一六（一七〇三）年までとしたい。

A 延宝五（一六七七）年〜元禄一六（一七〇三）年の二六年

間

B 三八作（加賀掾一〇作・義太夫二七作）

天狗の内裏／他力本願記／世継曾我／以呂波物語／出世景清／三世相／佐々木先陣／薩摩守忠度／千載集／主馬判官盛久／盛久／今川了俊／日親聖人德行記／大原問答／大原問答（念仏往生記）／津戸三郎／烏帽子折／大覚大僧正御伝記（女人即身成仏記）／悦賀楽平太／天智天皇／豊年秋の田／融の大臣／せみ丸／文武五人男／大磯虎物語／吉野忠信／猫魔達／十二段／曾我七以呂波／本朝用文章／最明寺殿百人上臈／南大門秋彼岸／日本西王母／曾我五人兄弟／団扇曾我／百日曾我／天鼓（丹州千年狐）／曾根崎心中¹⁰⁾

C 謡曲関係文字譜の種類 二七種

うたひかゝり／うたひきん／ウタイ／ウタイサシ／ウタイハル／ウタイ中／ウタヒ／ウタヒクセ／ウタヒ地／下歌／次第／序うたひクセ／上歌／惣地謡／謡／謡ウ／謡カ、リ／謡クセ／謡クル／謡サシカ、リ／謡ハル／謡一セイ／謡下／謡詞／謡次第／謡中／謡中ウ

D 関連謡曲の種類 四六種

葵上／芦刈／敦盛／蟻通／鶴飼／「采女」／采女と天鼓／江口／景清／花月／兼平／通小町／邯鄲／清経／鞍馬天狗／実盛／狸々／関寺小町／蟬丸／千手／卒都婆小町／高砂／

忠度／玉鬘（玉鬘）／田村／張良／東北／融（羽衣）／鉢木（鉢木）／班女／班女と融／百万／富士太鼓／藤戸／船弁慶／松風／三井寺／三輪／紅葉狩／盛久／屋島／熊野
／楊貴妃／頼政／羅生門

Dの関連謡曲の種類においては、浄瑠璃の該当箇所には謡曲詞章のはっきりした引用はなくとも、謡曲名そのものが登場し、バックグラウンドに特定の曲の存在を仄めかすものを「」付で、また謡曲のきわめて印象的な語句、言い回しが一部に組み込まれており、前後の詞章からその曲名が推定できるものを（）付で示した。例えば義太夫正本「今川了俊」（貞享二年）にみられる文字譜「ウタイ」記譜箇所、「ゆやのまへ。はゝのいたはり身にかへて。花を見すつるかりがねの。」という詞章は、謡曲「熊野」に関するものとして「」付で処理している。

なお、一定の長さを有し、複数の謡曲にみられる詞章が浄瑠璃に引かれている場合、または複数の謡曲から切り貼りする形で詞章が形成されている場合は、その謡曲名を、〇〇と〇〇、という形で記した。

さて、加賀掾と義太夫が、最もライブルとして競い合っていたと考えられる貞享期（一六八四〜七）には、思いの外謡曲関係の節付は少ないといえる。例えば、貞享四年の加賀掾正本「盛久」・義太

夫正本「主馬判官盛久」は、謡曲の「盛久」を主要な題材のひとつにしたと考えられる作品であるが、謡曲関係の節付をしているのはそれぞれ三箇所、該当する謡曲詞章も、「敦盛」「羅生門」「盛久」（加賀掾「盛久」）、「鉢木」「清経」「敦盛」（義太夫「主馬判官盛久」）からの引用で、あえて謡曲「盛久」には寄りかからないという自主性が感じられる。

ところが、近松が一時期浄瑠璃から遠ざかり、主として歌舞伎作品を執筆していた元禄期に、謡曲関係記譜の数は急増する。【表①】¹²⁾は、「近松全集」謡曲関係記譜の数は急増する。【表①】は、立つ作品、義太夫正本「悦賀楽平太」（元禄五年）・「融の大臣」（元禄六年）、加賀掾正本「猫魔達」（元禄一〇年）、「南大門秋彼岸」（元禄一二年）、「南大門秋彼岸」を改作した義太夫正本「日本西王母」（元禄末年）、同じく加賀掾正本「丹州千年狐」の版木を流用した義太夫正本「天鼓」（元禄一四年）のデータを抜粋したものである。

この表を追ってゆくと、例えば「悦賀楽平太」・「融の大臣」には、謡曲「卒都婆小町」と「融」の詞章引用が集中していることがわかる。加賀掾の「猫魔達」に至っては、調査した一二三作品中、最も謡曲関係文字譜が多い作品で、しかもその撰取元の謡曲は、非常に人気の高い、ポピュラーな曲ばかりとなっている。義太夫と加賀掾ともに、貞享期の、いわば緊張感をもった節付とは打って変わって、安易とも言われかねないやり方である。

ちなみに、右に挙げた「悦賀楽平太」・「融の大臣」・「猫魔達」は、いずれも近松存疑作とされている。『近松全集』が、存疑作の中でも近松真作の可能性がかなり高いものを厳選しているとはいえ、例えば加賀掾正本「猫魔達」などは、加賀掾が手を入れて、謡曲詞章の引用を増やしているということもあり得ないとはいえない。また、近松作と考えられている「南大門秋彼岸」と「日本西王母」、「丹州千年狐」と「天鼓」も、浄瑠璃作者を必ずしも尊重しなかった加賀掾が先行して語っていること、複雑な版本の流用問題等から、その他の近松作品に比して、完全な近松作とするにはやや問題があると
言わざるを得ないだろう。従って、前述したような謡曲詞章引用の増加に、近松が関与していると断定することは難しい。むしろこういった現象は、この時期、晩年に差し掛かっていた加賀掾と、竹本座の運営に苦心していたという義太夫が、観客が慣れ親しんでいる謡曲に、意識のどこかで依存していた結果とみるべきではないだろうか。

なお、近松が加賀掾に提供した「猫魔達」「南大門秋彼岸」「丹州千年狐」が、近松の文章そのものを保っていると考えた場合、それはそれで興味深い。近松が、謡曲を好む加賀掾に合わせ、一種のサービス精神で謡曲詞章引用の多い作品を書き与えたと解釈することも出来るからである。この期間、歌舞伎作者として、役者の魅力を引き立てる作品を心がけていた筈である近松の状況から、その可能性も十分に推測できよう。

II 竹本座独走期

本節では、近松が竹本座の座付作者となった初めての上演作品「用明天王職人鑑」（宝永二年）から、義太夫の最後の語り物となる「娥歌かるた」（正徳四年）までの、四七作を対象として考察を行う。

A 宝永二（一七〇五）年〜正徳四（一七一四）年の九年間
B 四七作（義太夫四七作）

用明天王職人鑑／田村將軍初観音／心中二枚絵草紙／本領
曾我／加増曾我／卯月紅葉／堀川波鼓／卯月の潤色／五十年忌歌念仏／松風村雨束帯鑑／心中重井筒／丹波与作待夜のこむろぶし／雪女五枚羽子板／けいせい反魂香／心中刃は水の朔日／淀鯉出世瀧徳／傾城吉岡染／心中万年草／酒呑童子枕言葉／孕常盤／源氏れいぜいぶし／兼好法師物見車／碁盤太平記／吉野都女楠／鎌田兵衛名所盃／源義経将某経／薩摩歌／曾我扇八景／曾我虎が磨／今宮心中／冥途の飛脚／百合若大臣野守鏡／大職冠／夕霧阿波鳴渡／けいせい懸物揃／姫山姥／長町女腹切／穠静胎内拵／嵯峨天皇甘露雨／弘徽殿鶴羽産家／賀古教信七墓廻／当流小栗判官／天神記／持統天皇歌軍法／相模入道千足犬／釈迦如来誕生会／娥歌かるた

C 謡曲関係文字譜の種類 一五種

(ウタイ)¹⁵／ウ (ウタイ)¹⁶／ウクイ／ウタイ／ウタイウ／ウタイサシ／ウタイハル／ウタイ詞／謡／謡カ、リ／謡キン／謡クセ／謡フシ／謡一セイ／謡詞／謡地／謡中

D 関連謡曲の種類 四四種

安宅／敦盛／海土／(井筒)／善知鳥／江口／大江山／女郎花／柏崎／兼平／熊野／(邯鄲)／清経／(熊坂)／実盛／猩々／関寺小町／卒都婆小町／高砂／「高砂」／玉鬘／田村／張良／天鼓／藤栄か自然居士／道成寺／東北／融／野宮／白楽天／班女／船弁慶／松風／松虫／三井寺／三輪／「三輪」／屋島／屋島と富士太鼓／山姥／遊行柳と西行桜／楊貴妃／頼政／羅生門

前節において、「悦賀楽平太」と「融の大臣」が、それぞれ集中して謡曲「卒都婆小町」と「融」の詞章を引用していることを紹介したが、実は、第Ⅱ期の初頭、宝永二〜四年にも、同様の例が続けて確認できる。この時期のデータを、【表②】に示したので参照されたい。

このうち、「用明天王職人鑑」「堀川波鼓」「松風村雨束帯鑑」は、それぞれ主要な題材を謡曲「道成寺」(「用明天王職人鑑」)、「松風」「堀川波鼓」「松風村雨束帯鑑」に求めたものである。そして、これらの作品中にみられる謡曲関係文字譜は、「用明天王職人鑑」と

「松風村雨束帯鑑」の場合、すべて題材となった謡曲から引用された詞章に付されている。「堀川波鼓」でも、五箇所の謡曲関係記譜のうち、三箇所が謡曲「松風」からの引用である。作者が謡曲を題材に組み込んだ上で詞章も多く引用し、それに太夫が謡曲関係の節を付して語る、というパターンがこの時期の特色となっている。作者と作曲者が、ともに謡曲の持つ力を積極的に活用しようとした時期であったといえよう。

しかしこれ以降、浄瑠璃作品における謡曲関係記譜は、いわば安定期に入ることになる。例えば、これまで主流を占めていた漢字表記の「謡」に代わり、片仮名表記の「ウタイ」がほぼ定着をみる。また、謡クセ・謡クル・謡サンカ、リ・謡ハル・謡下・謡詞等々、多種多様だった謡曲関係文字譜も減少して、最も単純な「ウタイ」が好んで利用されることとなる。

さらに、浄瑠璃一作品中にみられる謡曲関係文字譜の、撰取元となる謡曲名に関しても、一曲に偏らずまんべんなく採用されるようになっていった。宝永七年の「吉野都女楠」を一例とすると、謡曲関係記譜箇所 of 撰取元謡曲名は、「実盛」「兼平」「柏崎」「屋島」「富士太鼓」といった具合に、バラエティーに富んでいる。

こうした変化の詳細を知るにはさらなる調査が必要であるが、作者による同一の謡曲からの偏った詞章引用、または太夫による謡曲詞章への安易な謡曲関係記譜の、いずれか一方、または両方が慎まれるようになった結果と考えると良いだろう。義太夫節にとってこ

表 1

浄瑠璃作品名	大夫	上演年	踏名	謡曲名	浄瑠璃詞章
悦賀楽平太	義太夫	元禄05	謡	卒都婆小町	たてゑぼしをかざおりかりぎぬの袖を打かついてつまのためにはしうとの敵。
				卒都婆小町	むつかしの人のけうけやな。
				卒都婆小町	いさごをたうとかさねつ。わうごんのはだえこまやかに。花を天地にさげつ。
			謡ウ	班女と融	(かたみの刀)身をはなはずもつや田子のうら。あづまのはての国々迄。
			謡下	?	もとよりみうらは。一門九十三騎にて。かげふかきそまぎの中に佐原の十郎は。
			謡詞	卒都婆小町	(むつかしの人のけうけやな。それはさどりのたえなることば。まよひの女人は思ひも
融の大臣	義太夫	元禄06	謡	?	あけをうばふと名をたて。もろこし人はにくめどもかのひと。もとの初ゆかり。
				?	くろかみ山。すがたもわかきあをば山。松にごゑあるをとづれば。
				融	もつやたごのぼう。たごのうら。あづまからけのしほ衣。くめは月をも。
			謡詞	融	あらおもしろのゆうがくや。そも明月の其中に。まだはつ月のよみ／＼に。
			融	是は東国がたより出たる僧にて候。我いまだ都を見ず候程に。此度思ひ立都に	
			融	さかの天皇の王子。融の大臣かのうらのてうぼうをしたはせ給ひ。鳥々のふぜいを	
猫魔達	加賀掾	元禄10	謡	花月	こしかたより。今の世までも。たえせぬものは恋といへるくせもの。
				班女	せめてものかたみのあふぎ手にふれて。風のたよりと思へども。なつもはや
				江口	(うたへや。)うたへうたかたの。あはれむかしの恋しきは今も。遊女の舟あそび。
				葵上	我身はよもぎふの。もとあらざりし身と成て。葉末の露ときへもせば。
				?	いつぞやの謡うたひ能も一手舞候。御合力をと姫君の
				景清	さもしやかた／＼よ。源平互にみるめもはづかし一人をとめん事は
				船弁慶	こゑをしるべに出舟の。とももりがしづみし其有様に。又義経をも海にしづめんと
				船弁慶	べんけいをしへだて打物わざにてかなふまじと。数珠さら／＼とをしもんで。
				卒都婆小町	(まして霜雪)雨露。涙をだにもをさふべき袂も袖もあらばこそ。今はろどうに
				?	はまなれやさびなみや。／＼。いきの松ばら。松のうはばをさらり／＼とさゝらの
				?	(しんみの鬼と夕)風にこずゑのこのまや。さはぐらむ。
				葵上	丸しきのまどのまへ十丈の床のほとりにゆがの法水をたゝえ三みつの月を
				?	(尊像は失給ひ)地網計ぞ残りたるあら有がたや明王は降魔の利剣をふりあげて。
謡カハリ	?	いで／＼かぢし申さんと。ちのにんぎやうをつくらせ。三ぢうのたかだな五しきのへい。			
南大門秋彼岸	加賀掾	元禄12	謡	邯鄲	思ふも夢も。皆きへ／＼と。(中略)有つるかたみの枕の夢はさめにけり
			謡中ウ	蟻通	六義あり。是六道の。ちまたにさだめをいて六つの色を見するなり。さればわか
			次第	邯鄲	うきよの旅にまよひきて／＼夢路をいつとさだめん。
			謡ハル	邯鄲	一村雨のあまやどり。／＼日はまだ残る楼門に。あふよの夢をみるへしと形見の枕に
南大門秋彼岸 〔日本西王母〕	加賀掾 〔義太夫〕	元禄12	謡	実盛	らうむしやのかなしきは風にちぢめる。こぼくの力もおれて天にあらばねがはくは。ひよくの鳥とならん。地にあらばねがはくは
				楊貴妃	うらみは人をも世をも。思ひ思はじたゞ身一つの。むくひのつみや
			謡クル	?	はらへど／＼しうちやくの。ながきやみぢやくろかみも

表1-2

浄瑠璃作品名	太夫	上演年	譜名	謡曲名	浄瑠璃詞章
南大門秋彼岸 〔日本西王母〕	加賀掾 〔義太夫〕	元禄12	謡ウ	(玉鬘)	(ちかひのふみも) やきすてられし
日本西王母	義太夫	元禄末年	謡	松風	すてゝもをかれずとればおもかげに立まさる。おきふしわか かでまくらより。
				卒都婆小町	こひえぬ時はあくしん又狂乱の心付てなふ物たべなふ
				卒都婆小町	さもしやかた／＼よ。源平たがひに見るめもはづかし
				船弁慶	あらめづらしやいかに義経。思ひもよらぬうらなみの。こゑ をしるべに
			船弁慶	弁慶をしへだて打物わざにてかなふまじと。じゆずさら／＼ と	
			謡中ウ	蟻通	りくぎあり。これろくだうの。ちまたにさだめをいてむつのい ろを。見するなり。ほんらい
			謡次第	邯鄲	うきよのたびにまよひきて。／＼ゆめちをいつとさだめん。 是は民部卿豊舟にて候。
天鼓〔丹州千年 狐〕	義太夫 〔加賀掾〕	元禄14	謡	富士太鼓	我にははるゝむねのけふりこんくはいのなみだなるらん
				高砂	高砂や此浦舟にはをあきよよ。月諸共に出舟や。はやすみ の江の。
			謡ウ	采女と天鼓	(是は又猿沢の。水たう／＼として) 波ゆう／＼たり荒有が たの御弔ひやな。勳をそむきし
			謡ハル	田村	比もはや弥生始の春のけふ。／＼。早咲桜。をくれ梅桃は さかりの。へいごしに。
			謡詞	?	然るに某若年よりふえをこのみふき申候間。此度都名人の 笛を聞ならひ。

表2

浄瑠璃作品名	太夫	上演年	譜名	謡曲名	浄瑠璃詞章
用明天王職人鑑	義太夫	宝永02	謡	道成寺	花の外には松ばかり。うきがともには酒ばかり。くれそめて かうしたくらん
			ウタイ	道成寺	山寺のや。はるのゆふべをきてみれば。入相のかねに花 やちるらん
			謡	道成寺	去程に／＼尾上のかねの。月おち鳥ないて霜雪天に。
			謡詞	道成寺	もろこしのたつといひじりのくやう有と承り。かねのくやうに 参らばやと思ひ候。
			謡地	道成寺	月は程なく入しほの。月は程なく入しほの。けふりみちくる 小松ぼら。
田村將軍初観音	義太夫	宝永	ウタイ	田村	さるほどに山河をうごかず鬼神のこゑ。天にひびき地にみ ちて。ばんぼくせいざん
心中二枚絵草紙	義太夫	宝永03			
本領曾我	義太夫	宝永03	謡	熊野 (井筒)	いふつけの鳥がなくあづまちさして行道の。やがてやすら ふあふ坂の (友だち。)かたらひ夕ぐれごとのかどあそび。
			謡詞	熊野	今迄うたひかなでしに重て一曲所望とは。あら心なの村雨 やな。春雨の。ふるは
加増曾我	義太夫	宝永03	謡	?	すみのゑに。三五夜中の月びたひ。月のみふねにみさほ さし。
				屋島	ふねよりはとまのこゑ。くがにはなみのたて。つきにしらむ は。
卯月紅葉	義太夫	宝永03			
堀川波鼓	義太夫	宝永03	ウタイ	松風	扱も行平みとせが程。御つれ／＼の御舟遊び。月に心は すまの浦
				松風	御歌や立わかれ。いなばの山のみねにおふる。松としき かば。
				羅生門	つはものゝまじはり。たのみあるなかの酒えんかな。
				女郎花	じやるんの悪気は身をせて／＼。つるぎの山の上に恋 しき人は
			ウタイハ ル	松風	かたみこそ今はあたなれはなくは。わするゝ隙も有なんと。 よみしもことはりや
卯月の潤色	義太夫	宝永04			
五十年忌歌念仏	義太夫	宝永04	ウタイ	天鼓	つたへ聞孔子は鯉魚にわかれ。思ひの火をばむねにた き。白居易は
松風村雨東帯鑑	義太夫	宝永04	ウタイ	松風	形見こそ今はあだなれはなくは。忘るゝひまもありなんもの を。
				松風	塩くみ車。わづか成うき世にめぐる。はかなさよ。心づくし のあき風に。
				松風	あらうれしやあれに行平のおたち有が。松風とめされさふ らふぞやいで参らふ。
				松風	月はひとつかけはふたつみつしほの。よるのまくらに月を ねせて。ういとは

した変化は、芸能としての成熟の一端を示すものといえるのではないだろうか。

Ⅲ 義太夫没後の新世代期

第三期は、義太夫没後の正徳四年「音曲百枚笹」から、作者・近松門左衛門の絶筆となった享保九年「関八州繫馬」までを対象とする。

A 正徳四（一七一四）年〜享保九（一七二四）年の一〇年間

B 二八作（竹本政太夫、その他二八作）

音曲百枚笹／艳狩劍本地／大経師昔暦／生玉心中／国性爺合戦／国性爺後日合戦／鍵の権三重帷子／聖徳太子絵伝記／山崎与次兵衛寿の門松／日本振袖始／曾我会稽山／傾城酒吞童子／善光寺御堂供養／博多小女郎波枕／本朝三国志／平家女護島／傾城島原蛙合戦／井筒業平河内通／双生隅田川／日本武尊吾妻鑑／心中天網島／津国女夫池／女殺油地獄／信州川中島合戦／唐船断今国性爺／浦島年代記／心中宵庚申／関八州繫馬

C 謡曲関係文字譜の種類 一一種

ウタイ／ウタイカ、リ／ウタイサシ／ウタイノット／ウタイ詞／謡／謡クル／謡ハル／謡一セイ／謡詞／謡同音

D 関連謡曲の種類 三一種

葵上／葵上と道成寺／海土／杜若／景清／（景清）／花月／兼平／賀茂／通小町／邯鄲／「逆鋒」／自然居士／俊寛／（俊寛）／猩々／隅田川／関寺小町／高砂／融／（木賊）／難波／野宮／白楽天／羽衣／鉢木／班女／松風／松山鏡／松虫／紅葉狩／山姥／羅生門

この時期については、Cの謡曲関係文字譜の種類が格段に減り、整理が進んでいることが感じられること、Dの関連謡曲も、やや単純化していることなどが指摘できるが、最も注目すべきなのは、謡曲関係記譜箇所への撰取元となる謡曲名が、不明となる確率が格段に高くなることであろう。これまでの時期にも、謡曲関係記譜箇所の詞章を『謡曲二百五十番集索引』で調べても、撰取元の謡曲に辿り着けないことはあったが、その確率は、第一期で一六％、第二期で一五％にしかならなかった。それに対して、この第三期での不明率は、三七％にのぼる。実に、全体の四割近くが撰取元謡曲不明、ということになるのである。

その原因としては、『謡曲二百五十番集索引』に所収されていないような、珍しい番外曲などから詞章が引用されていることも考えられなくはないが、撰取元不明箇所を集めた【表③】を見てゆくと、むしろ謡曲関係文字譜が、今迄とは異なる用いられ方をしていくことが明らかになってくる。

表 3

浄瑠璃作品名	上演年	請名	謡曲名	浄瑠璃詞章
絶狩剣本地	正徳04	ウタイ	?	夕日も年もかたふきて。
国性爺合戦	正徳05	ウタイ	?	すみよしにかたかへりきてうを。まち申さんと。ゆふなみのみぎは
国性爺後日合戦	享保02	ウタイ	?	心上の須弥山是に有。大明一国の山河草木。
日本振袖始	享保03	ウタイ	?	夢ころ。／＼夢のうきはし。ながき夜。ながき夜の。
		ウタイノット	?	其高さ七多羅樹たとへ天地はくつかへる共。取たる剣はかへすましと。声に打そふ松の風。／＼なびく草木や日月の旗を。なびかせ 掃落有。
善光寺御堂供養	享保03	ウタイ	?	すでにじこくも夜半の雲。天をこかせる篝の煙。谷ふかふして嶺そびへ。
		謡一セイ	?	爰は所も難波瀉ほり江の芦の。かたはしに。しるもしらぬも名を尋
本朝三國志	享保04	ウタイ	?	宝の池の面くどぐちの浜の真砂金色五しきの玉と変じ岸に あかるぞありがたき。
平家女護島	享保04	ウタイ	?	抑天竺まかた國。月かい長者が館室は。五々のろうかく三十の宝蔵。
傾城島原蛙合戦	享保04	謡	?	もろこし遠く出舟の／＼。百里千里もとらの介さんーとびの。
双生隅田川	享保05	謡	?	(民もゆたかに君がお田は)実のるぞ程なかるらん実のるぞ。程なかりける。
日本武尊吾妻鑑	享保05	謡	?	そも／＼此御神は。すべらぎの御代はじまりて十六代の尊主。
津国女夫池	享保06	ウタイ	?	柳のみどりかけふかき。御池のおもだかかきつばた。
信州川中島合戦	享保06	謡	?	そも／＼七草の城くはくと申は。城の廻り一百四十三町余。二方は海浪漫々と。
		謡一セイ	?	きりまにすかた入よと見へし。俄にどつとおちこと山みね岩ほもくどくる計。
		謡ハル	?	一張の弓のいきほひたり。東南せい北の敵をやすくしたかへり。
唐船断今国性爺	享保07	謡	?	八重九重も遠ざかる。なごりほつせの涙の玉。ひろへば道もはかどりて。
浦島年代記	享保07	ウタイ	?	うはなり打たる此鉄杖は。きせるのらう／＼。
関八州繫馬	享保09	謡	?	折たくしばの夕けふり。くすばる顔もせんじ茶の。はながもしぶく聞えけり。
		ウタイサン	?	時に更行夜嵐の。こずゑをならすたにかげより。かうべにかゝやくりんとうをいたどき。
				雲をふんでは花かとおしむそはかげの。たに水もしづかならで。さはかしき木からしの。
				尾上はちくきにうづもれて風も錦や渡るらん。
				縁はつきせぬよるへの水に入よと見へし佛は波に。残してうせにけり
				あげのくはいらうしん／＼と。神さび渡る折からに。翁すがたのいざり松。
				素襖袴の袖をつらね。ゑぼしをならべて我も／＼と。座につけば。
				源の頼信朝臣。手廻り少々御供の。中にも一人当千の渡辺の綱。直衣の下に腹巻し。

浄瑠璃太夫たちの「ウタイ」考

例えば、「浦島年代記」(享保七年)の「縁はつきせぬよるへの水に入よと見へし佛は波に。残してうせにけり」という詞章は、いかにも謡曲風の文章で、撰取元がありそうな感があっても、ぴったりするものは特定できない。さらに、「信州川中島合戦」(享保六年)の、よく知られた漢文をもじったような「雲をふんでは花かとおしむそはかげの。たに水もしづかならで。さはかしき木からしの。」という詞章、謡曲によくある言い回しを真似た「善光寺御堂供養」(享保三年)の「抑天竺まかた國。月かい長者が館室は。五々のろうかく三十の宝蔵。」などが代表的なものである。つまりこういった事例は、義太夫没後の第二世代の太夫たちが、それまでの謡曲詞章引用部分を謡風に語っていた単純ともいえる節付法から脱却し、謡曲関係の節付を、より効果的に応用できるようになってきたことを表しているのではないだろうか。

一方で、作者の近松が、この時期になって意識的に右のような謡曲風であって謡曲そのものではない詞章を作品中に取り入れるようになったのか、もしくはこれまでもそういう傾向があったにも拘

らず、作曲者の方がそれに対応できなかったのかということ、未だ統計もなく不明である。また、当時の浄瑠璃作者と太夫の間に、節付に関する話し合いがあったのか否かということも、現在は知られていない。

しかしながら、作者が謡曲詞章を引用すれば、作曲者がそこに謡曲関係の節を付ける、という単純な図式が、第三期にみられるような発展を遂げたことは、浄瑠璃作品の宿命であるところの作者・作曲者間の溝を、一步縮めたといっても過言ではないだろう。この時期の近松の作品には、「平家女護島」や「双生隅田川」など、謡曲を主要な題材のひとつとした名作も誕生している。そういった作品中でも、謡曲関連記譜の六割は従来通り謡曲引用詞章に付されて効果を上げており、浄瑠璃にとつての謡曲摂取は不可欠なものとなっていた。しかしそこに、約四割もの斬新な節付法が加えられ、義太夫節における謡曲関係の節付は、義太夫没後の熟年期の近松と第二世代の太夫たちにより、この時期自在に花開いたのである。

結 び

前節に記した、謡曲風に作った詞章への謡曲関係記譜の応用は、現在の我々からみれば、そう難しくなく、すぐに考えつくような手法であるようにも思える。しかし、謡曲をこよなく愛した加賀掾のみならず、加賀掾の謡曲趣味を批判した新進気鋭の義太夫が、そう

した工夫に思い至らなかつたということは、浄瑠璃にとって偉大な先行芸能であつた謡曲に対する諸々の固定観念に、義太夫でさえも、深く捉われていたことを示しているのではないだろうか。それに対し、義太夫の芸や近松の戯曲に惹かれて入門したであろう第二世代の太夫たちには、そうしたしがらみが少なかつたのかも知れない。いわゆる生みの苦しみを味わいながら初代義太夫が確立した義太夫節は、この柔軟な世代へと継承され、浄瑠璃における謡曲摂取のあり方も、さらなる進展を遂げてゆくことになる。

義太夫節初期を支えた作者・近松門左衛門は、義太夫の亡き後も「国性爺合戦」などの名作を著したのち、後継者となる作者を養成しつつ、享保九年に没した。その後、かつて「平家とも舞とも謡ともしれぬ島者」と揶揄された浄瑠璃は、竹本政太夫ら第二世代の太夫たちの手によって、「操り段々流行して、歌舞妓は無が如し」とも称えられた黄金時代を迎えるのである。

注

- (1) ただし、万治三年以降の刊行説あり。
- (2) 延宝六年刊。『日本庶民文化史料集成 第七卷 人形浄瑠璃篇』(昭和五〇(一九七五)年、三一書房刊)より引用。
- (3) 『日本庶民文化史料集成 第七卷 人形浄瑠璃篇』より引用。
- (4) 平成七(一九九五)年、和泉書院刊。
- (5) 『演劇研究』第二十七号(平成一六(二〇〇四)年、早稲田大学演劇博物館編)所収。

(6) 昭和六〇(一九八五)〜平成八(一九九六)年、岩波書店刊。

(7) 大谷篤藏編、昭和五三(一九七八)年、赤尾照文堂刊。

(8) 『岩波講座能・狂言 III 能の作者と作品』(昭和六二(一九八七)年、岩波書店刊)所収。

(9) 近松存疑作の詳細については、年代順に以下の通り。(情報は、『近松全集』に拠る。)

「天狗の内裏」／「他方本願記」(脇方簽に「作者近松門左衛門」とあり。)
／「以呂波物語」(山本版十行本内題下に「近松門左衛門作」とあり。)
／「日親聖人徳行記」(元禄初年(推定)。脇方簽(透写本)に「作者近松門左衛門」とあり。)
／「大原問答」(加賀掾正本「念仏往生記」の版木流用。元禄初年頃(推定)。奥書に「近松門左衛門」とあり。)
／「大原問答(念仏往生記)」(義太夫正本「大原問答」が、加賀掾正本「念仏往生記」版木流用の際に削除(差し替え)をした部分。)
／「悦賀楽平太」(元禄五・一・二四以前(推定)。山本版九兵衛版絵入一七行本の内題下に「近松門左衛門作」とあり。)
／「融の大臣」(元禄六・一以前(推定)。脇方簽(透写本)に「作者近松門左衛門」とあり。)
／「文武五人男」(九・一〇行本奥書に「近松門左衛門」とあり。)
／「猫魔達」(内題下に「近松門左衛門添削」とあり。)
／「田村將軍初観音」(元禄一一・一以降、正徳四・九・一〇以前(推定)。宝永初年頃か。奥書に「近松門左衛門」とあり。)
／「当流小栗判官」(正徳四・九・一〇以前(推定)。内題下・奥書に近松の署名あり。)
／「善光寺御堂供養」(内題下に「添削近松門左衛門」とあり。)

(10) このうち、義太夫が加賀掾正本「丹州千年狐」の版木を流用した「天鼓」、同じく義太夫正本「大原問答」中の、加賀掾正本「念仏往生記」の版木流用部分、「大原問答(念仏往生記)」に関しては、加賀掾正本としてカウントしている。

(11) 「主馬判官盛久」と「盛久」は、ほぼ同内容で、節付が異なる。その先後関係については諸説あるが、現在では義太夫の「主馬判官盛久」先行説が有力となっている。詳しくは、山根爲雄『薩摩守忠度』等の諸問題―

加賀掾と義太夫をめぐる(『近松正本考』(平成一六(二〇〇四)年、和泉書院刊)所収。初出は昭和五七(一九八二)年)を参照されたい。

(12) 近松の作品は、上演年があくまでも推定である場合が多いため、例えば「田村將軍初観音」で、推定される上演年が「元禄二一年一月以降、正徳四年九月一〇日以前」の場合、上演年の項目には正徳四年を採用した。各作品の上演年詳細については、『近松全集』に拠られたい。

なお、【表1】中の「南大門秋彼岸(日本西王母)」の項は、「日本西王母」が「南大門秋彼岸」の版木をそのまま流用している箇所を示すものである。

(13) ただし、統計の性質上、謡曲関係の記譜がなされた謡曲詞章引用に限る。

(14) 底本にはないが、校異本に記譜がみえるものを()内に記した。

(15) 右に同じだが、この場合は底本に(ウ)の記譜あり。

(16) (ウ)の誤刻と考えられる。

(17) 『浄瑠璃譜』(寛政頃成立)。日本演劇文献集成第二『浄瑠璃研究文献集成』(山本二郎解説・校訂、昭和一九(一九四四)年、北光書房刊)より引用。